



宮坂 静生薦 岳 10 月
推

夏安居やガンガ一浸かり泥遊び
なにならぬにになれるかなあけむし
水菓食ぶ虫歯の奥にある宇宙
夕焼や今日の失敗大笑ひ
焦るなよ俺に統けと蝸牛
坂道の麻布狸穴金魚壳
脱ぎ下手な蛇もゐるべし草の影
夜の強氣朝は弱氣や水中花
八月のまんまと動かぬ三輪車
芋の露浴びて寄せ遣る二番泥
身の内にビービー弾や犬に夏
温度計銃に似てをり夜の秋
エレベータにある陥窠^{おとしあな}熱帶夜
夏山や孤独究めて自由とは
月見草ひとよひとよにひとみごろ

佐々木寿子 遠藤洋子 田原章子 青木弘典 加藤律子 木澤つむ 田村道子 中澤良子 鎌田文子 中原節子 佐々木正信 高橋由紀子 三品吏紀 小熊旭 珠凪夕波

山昏れて空の熱りや原爆忌
西瓜売りに子と換へぬかと言はれし日
敗戦日鍬を家族と言ひし妣
淬ぐごと飛魚波に突きささる
ゆくりなく御嶽御願の天を鷹
姥百合の咲きてもののけるやうな
捕へられてんてこまひの蛸の脚
夏野行くごとく庭薙ぐ母郷かな
雀一家旅立ちて夏果てにけり
泡盛や耳の奥から轆轤唄
梅雨葺の己が吐息に萎えにけり
精霊の卵の孵る夏至の夜
風鈴泣くまといし風と情分ち
白繭のかがやきながら煮られけり
四十年教師続けて冷汁

野口美智子 渡辺真帆 田中純子 川村五子 眞榮城いさを
久保美智子 小林春代 満田光生 ビュニャールしづ子
西村節子 丸山貴史 佐藤由美 古畠富美江 太田薰

岳の源泉 十月

(494)

宮坂 静生

— 同人集・岳集・青雲集から

はじめに。岳関東支部句会を再開した。佐藤健支部長や田村道子幹事の尽力による。参加者も元気。顔の覆い(FACE SHIELD)を貰ったのにはびっくりした。中国製とある。効果があるものか気になるが、これも一つの発見には違いない。少しの遊びもある。

青雲集から岳集へ何人か推薦した。自薦を考えていたが、年に一度ほど選者の推薦にしたい。青雲集への投句希望者は佐藤映二同人会長の「四季と折り合う」が文庫版大字の本になる。お洒落な本らしい。

雀一家の旅立ち——フランス異変か

雀一家旅立ちて夏果てにけり ピュニヤール子

雀は居付いて四季、移動しないと考えていたが、フランスの雀は晩夏に移るらしい。コロナ禍の影響ではないが、異変に気付いたものか。地球規模で世が変わる。温暖化現象が根本原因か。島国日本より大陸の居住者は敏感なのであろう。

山昏れて空の熱りや原爆忌 野口美智子

広島・長崎の現場詠ではないが、原爆忌を日常どのように捉えるか、一つの典型的な詠み方を教えてくれる。「空の熱」故郷の庭が草ぼうぼうか。無造作に草刈鎌を振り回している。ちまちました作業ながら、気持は夏野の果を見つめる大志をもつて。身と氣持のちぐはぐさ加減が可笑しい。

捕へられてんてこまひの蛸の脚 小林 春代

蛸の脚が錯綜する。「てんてこまひ」とは茶化し。どこか自分を蛸に投影しているようなおかしみもある。

夏野行くごとく庭薙ぐ母郷かな 満田 光生

故郷の庭が草ぼうぼうか。無造作に草刈鎌を振り回している。ちまちました作業ながら、気持は夏野の果を見つめる大志をもつて。身と氣持のちぐはぐさ加減が可笑しい。

泡盛や耳の奥から轆轤唄 丸山 貴史

職人好き。とりわけ陶業への関心が深い作者。泡盛を口にしながら轆轤唄を呼び起す。リズムに敏感でいたい。歌謡曲の修業は玄人肌。調子を擱むことが大事なのは俳句と同じ。

今月の秀句

西瓜売りに子と換へぬかと言はれし日 渡辺 真帆

衝撃の作。満州からの帰途、中国の現地の西瓜売りにいわれたものか。日本人の子が欲しい。戦争はすべての価値を転倒させる。普段から非人道的な感じ方を厳しく拒否する姿勢を持つことはいうまでもない。特異な句であるが、單なる回想句ではない。人の世の根幹に触れている。

り」に八月初旬の季節に重ねた忘れ難い思いが滲む。あえていえば、淡泊な中にもう少しのこだわりがほしい。

敗戦 日鍬を家族と言ひし妣 田中 純子

鍬一本で家族を支えた苦しい戦中を偲んだ作。鍬の擬人化ではない。血肉化された鍬とは涙が滲む。手足になつた鍬。いのちの鍬。十日夜に供える斗柄程度の飾りとも違う。

滓ぐごと飛魚波に突きまさる 川村 五子

自分で焼きを入れるように飛魚が波に突きまさる。自虐的。飛魚の激しい行為は宿命か。「滓ぐ」の動詞が効いている。

ゆくりなく御嶽御願の天を鷹 眞榮城いさを

宮古島詠。ニライカナイの海神に祈る場の上空に鷹がいる。はぐれ鷹か、落鷹か。こんな格調高い光景が見えるとは、沖縄の地貌はどこも荘厳な空気に満ちている。「ゆくりなく」が平常心の表白。

姥百合の咲きてもののけゐるやうな 久保美智子

姥百合の蒼白い花には妖気が漂う。「もののけ」と捉えた。繩文以来の花なので、人の世の変転に伴う魑魅魍魎をたっぷりと昇華してきたようだ。常套的な発想を僅かに出ているか。

梅雨茸の己が吐息に萎えにけり 西村 節子

他に同人集から推薦候補作をあげる。

百物語終の一灯より羽音 山崎 妙子

涼しきは蛇を戴く土偶かな 宮坂 直子

夏負けや空見るだけの山の家 小平 富子

冷汁からの連想——長い教員暮らしの生き甲斐

四十年教師続けて冷汁 太田 薫

小魚や野菜の具を煮込んだ汁を冷やしたもの。冷えたものではなく、夏の食欲をそそる仕立て。本来、南国宮崎の郷土料理。地貌季語なのである。教師暮らしの忙しさから冷めた汁をするというのではない。冷汁の取り合せに長い教師生涯の地味な工夫が見える。そこに惹かれた。

精靈の卵の孵る夏至の夜 古畑富美江

夏至は冬至とともに地上でなにか起きそうな予感を孕む。これから盆を控え、本格的なお化けの時期を迎える。まず精

靈の卵が孵る。いわれてみるとわかり過ぎるが、小学生を相手に長い教師経験のある古畑先生のお得意のところ。

夏安居やガンガー浸かり泥遊び 小熊 旭
ガンガーはガンジス川。聖なる川に浸かる泥遊びが修行。青雲集での優秀者。大景を捉え仏心への探求が感じられる。

なにななるなになれるかなあけむし 珠皿 夕波

毛虫への語りかけ。二十代の作者の発想は毛虫から。毛虫への優しい語りは蝶を予測しながらいわない。前途洋洋。

水菓食ぶ虫歯の奥にある宇宙 三品 吏紀

虫歯がじーんと沁みる。根が深いか。「宇宙」と見て、なにごとも明るい。詩人を目指し、始めから俳人を目指す。

今月の秀句

風鈴泣くまといし風と情分ち 高木 忠雄

古風な作り方だ。もう誰もこんな古めかしい擬人化は用いないであろう。遊女が馴染みと別れがたくいる、ちまちました場面を連想する。ところが、案外、こんなじめじめ俳句が時に面白い。僅かの風に風鈴が鳴らうとしている。そんな、詩情があるとも思われないところに目を付けた。ご自分でもこれが俳句になるかどうか自信がなかつたのではないか。煮締めた俳味。

夕焼や今日の失敗大笑ひ 高橋由紀子
一日の終り。しくじりにくよくよしないで笑い飛ばす大らかさ。綺麗にまとめないで、この発想の今までいい。

焦るなよ俺に続けと 蝶牛 佐々木正信
つぶやきのじとし。箴言や諺に近い句であるが、俳句らしい俳句でないところが面白い。

坂道の麻布狸穴金魚壳 中原 節子
坂道にかかる。「金魚えー金魚」。盥の水が揺れてさあ大変。

大使館がずらり。そこにしがない金魚壳。我慢我慢。

問題提起—風景を描くか、存在を捉えるか

脱ぎ下手な蛇もゐるべし草の影 鎌田 文子

「草の影」と置いた。なくともいいが、あえて場所を描き風景句にした。これを、たとえば、こんな句に変えてみる。

脱ぎ下手な蛇もゐるべしわが五十歳

これは風景ではなく、自分のあり方、難しくいうと「存在」を描いている。俳句の究極はもの一つ一つが確かに在ることを描くものと思う。ここでは「風景」と「存在」の違いを知つて貰いたい。俳句を考える上でのヒントを提示した。

夜の強気朝は弱気や水中花 中澤 良子
評判の『思考の整理学』(外山滋比古・ちくま文庫)に、

一晩寝かせる大切さを説くところがある。夜は激烈、朝は穏やか。ラブレターは朝にもう一度見直せ。俳句も同じ。対比が鮮やか。

八月のまんまと動かぬ三輪車 田村 道子

さしづめ原爆の地に放り置かれた三輪車を想起する。浮かぶのは子ども。永遠に消されてしまった子ども。人類はこの子どもを忘れないように、歴史の歎車を回さねばならない。

芋の露浴びて寄せ遣る二番泥 木澤つとむ

「二番泥」がいい。二番草は聞くが、二番泥とは初耳。里芋畑は泥田か。作者は南砺市在住。穫り入れは上々か。

身の内にピーピー弾や犬に夏 加藤 律子

「ピーピー弾」とはなにか。わからない。勝手に想像すると、腹がピーピーであっても、そこには「ピーピー弾」が入っているのだと思う。アニメの世界の話のようでもあるが、こ

月見草ひとよひとよにひとみごろ 佐々木寿子
無人の昇降機。熱帯夜。これだけでもびくっとする。どんなおとしなががあるのか知らないが、不用心なのはわかる。問題提起だけの句であっても、不安という詩情がある。

エレベーターにある陥穿熱帯夜 田原 章弘

一日の終り。しくじりにくよくよしないで笑い飛ばす大らかさ。綺麗にまとめないで、この発想の今までいい。

かさ。金魚えー金魚」。盥の水が揺れてさあ大変。

坂道の麻布狸穴金魚壳 中原 節子

坂道にかかる。「金魚えー金魚」。盥の水が揺れてさあ大変。

大使館がずらり。そこにしがない金魚壳。我慢我慢。

月見草ひとよひとよにひとみごろ

昔、平方根 $\sqrt{1} = 1.41421356$ を諺めかして暗記した。「一夜に人見ごろ」。 $\sqrt{3} = 1.7320508$ は「ひとなみにおこれや」だったなあ。懐かしいねえ。月見草が夢見がちな学生時代を思われる。ちょっとびりセンスあり。これでいい。

青雲集

温度計銃に似てをり夜の秋 青木 義典

コロナ禍では手に、あるいは額に体温計を突きつけられる。あれは嫌なものだ。突然、銃を突きつけられた思い。夜の外食の店先か。興ざめであろう。これも我慢の内。

夏山や孤独究めて自由とは 遠藤 洋子

岳人の心境を捉えれば、「孤独究めて自由」という境地か。勝手といえば勝手。短い一生、それくらいの勝手は許されよう。家族や連合いには心配の種であるが、御本人は自由さと嘯く。夏山は冬山よりは登山者が多いので考え易い。

庭下駄の濡れて八月十五日 塩川 昭子

八月はうんと楽しくうんと悲しく

扇状地の屋根の反射や夏惜しむ

牧野 蘭 武居香織留

- このような言い方は採らない
○しばしば用いられ、流行りの言い方は採らない

原句 花火果つ一夜の空を使いきり
高名句 流星の使ひきれざる空の丈

この名高い句はしばしば類想を生み、「使ひきれざる」は

否定表現であるが、肯定表現にすれば、掲句になる。大事な

ところが真似なので採らない。

原句 伸ぶる伸ぶる雨の夏草小気味よく
原句 母微睡むや南瓜蔓伸びる伸びる

後者の方が面白いが、やはり流行りの言い方である。

原句 伽羅蕗の芯までしみる姑の味

原句 迎え火を焚く夫の背義父譲り

前者「姑の味」は言い方、後者「義父譲り」は義不要。

○既知のことを踏まえるだけでは独自な詩情がない

原句 疏黄島の青鯫兜太呼ぶ声

原句 疏黄島の骨八月十五日

原句 鳥渡る孤島待ち侘ぶ白骨

これらは金子兜太の青鯫の句が念頭にあり、さらに南方諸

島での遺骨収集が進まない現実を踏まえている。句材の重さ
に表現がぎくしゃくして自由さがない。やはり詩情がないと。
原句 雷走る越後筒石親不知
水上勉の小説名であり、季語だけでは新鮮な独自性がない。

○事柄を並べただけでは詩情がない

- このように推敲し、添削する
「逃がした」は要らない。語順を考える。

原句 寝過せば逃がした開花古代蓮
添削 古代蓮開花をみんと寝過しぬ

「逃がした」は要らない。語順を考える。

原句 千拓地へ墓標の電柱冬夕焼
添削 電柱の墓標のごとし冬夕焼

「千拓地」がなくとも、電柱が墓標のようだと凄い。

原句 終戦日思えば蟬と藜で命ながらへし
添削 終戦日蟬・藜でながらへし

「思えば」は不要。「命」も要らない。

原句 黄揚羽は巧みに浮遊風を織る
添削 黄揚羽は巧みに浮遊風を織る

「風を織る」は凝り過ぎ。「風まとふ」でよい。

原句 獺祭忌残す四半を如何生きる
添削 獺祭忌残す四半を如何に生く

原句 里山にフランゴ群赤蕎麦畑
添削 フランゴ群るる赤蕎麦畑かな

赤蕎麦畑を比喩としてフランゴ群を連想したのか、実際

動物園に接していたのか不明であるが、「里山」を省き、蕎

麦畑の比喩でフランゴ群を出したと見る方が面白い。

原句 身に積みシバベルの塔や夏果てぬ
添削 身に積みシバベルの塔や夏の果

「夏果てぬ」よりも「夏の果」の方が切れが良い。

池田 康樹
丸山 盛茶

藤森 岳仁
山脇意喜子

丸山 盛茶